

序章
歷史問題

戦後、我国最大の問題は歴史問題である。前科者の烙印を押された男が一生を日蔭者で過さねばならないやうに、歴史を断罪され、「侵略者」の汚名を負はされた儘の日本は、国際社会への完全な復権を達成したとは決して云へないであらう。

歴史問題とは何か。昭和五十七年に高校歴史教科書の文部省検定に対して中国が内政干渉を行なった第一次教科書騒動、昭和六十一年に内外を騒然とさせた高校教科書「新編日本史」検定に対する中韓兩國の干渉、同じ年の「藤尾発言」に対する韓国の、また六十三年には「奥野発言」に対する中国の抗議と圧力が、我国当局者をいかに動揺せしめ、卑屈な対応に走らせたかを想起してみればよい。

昨年（平成元年）も同様の問題が発生した。竹下首相が二月、「（第二次大戦が）侵略戦争かどうかは後世の史家が評価すべき問題だ」と国会答弁したことで生じた混乱を受けて、中国外務省が「日本軍国主義は、かつて侵略戦争を發動し、中国人民とアジア各国人民に巨大な災難をもたらした。この不幸な歴史に対して、我々は歪曲や否定を認めない」と反論してきた。これに対して我が政府は外交ルートを通じて「中国に対しては侵略的事実を否定することはできない」との基本的考へ方を伝へ、「理解を求める」のにこれ務める有様であつた。要するに中国は、後世の史家に待つのでなく、中華人民共和国の見解に従へると云ふわけである。

著者はかつてかう書いた。

——「教科書」や「首相の靖国神社公式参拝」が日中間の紛議となるたびに、中国側が好んで使ふ決まり文句が「戦争の加害者と被害者を混同することに反対する」と云ふものだ。この「日本」加害者」「中国」被害者」といふ図式が、日中近代史に関する中国の「公定史観」の基本構造なのであり、「教科書」や「靖国問題」に対するあ

の尊厳な内政干渉的言辞も、所詮は日本を加害者、自らを被害者と信するが故に違ひない。ところが、多くの日本人もこの中国側公定史観に依拠してをり、中国から「日本は加害者としての反省がない」の一言を浴びせられると、たちまち畏縮してしまふのが現下日本の情けない姿なのだ。「中国被害者説」は、今や中国が日本人を己れの前に拝跪叩頭せしめる切り札なのであり、この論を承認する限り、我国は未来永劫、中国に対して主従関係に立つ他ない（「中国」被害者説の神話、「諸君」昭和六十二年一月号）——と。

一体、この「主従関係」に、日本人はいつまで我慢しなければならぬのだらうか。

歴史とは民族の履歴書だ

そもそも日本人が日本の歴史を書くのに、中国や韓国に何ひを立てる必要は全くない筈だ。

「大東亜戦争への道」の「諸君」連載終了後に某現代史研究家と対談を行なったとき（「諸君」平成二年三―四月号）、その歴史研究家は筆者に反論する際に、しきりに「それでは中国が納得してくれないでせう」を繰返すのであつた。この先生にとつては、中国が納得し、承認したものが正しい歴史であるらしかつた。たしかに、この人の他にも常に中国の意向を忖度しながら、現代史の研究を行なつてゐるらしい歴史学者は我国に少なくない。そのような卑屈な精神から生れる歴史とは——いや、それはもはや歴史と呼ばれるに値せぬものであらう。

他国の「理解」や「承認」を得て自国の歴史を書く国はただの一つもない。あるとすれば独立国ではなく属国であらう。大体、中国や韓国の歴史教科書からして、虚実取り混ぜての反日記述だらけであることは周知のことだが、日本がその記述修正を求めたとしたら、彼等は応諾するであらうか。内政干渉として猛然逆襲してくるにきまつてゐる。

歴史とは民族の履歴書だ。どの民族も国家も、できるだけ暖かく自分達の過去を見ようとするのは自然なことだ

らう。だから各国は、それぞれにとつて都合のよい歴史を書かうとする。中国の歴史教科書は数十頁を費して阿片戦争を記述するが、英国の歴史教科書の中には阿片戦争について一行も触れてゐないものもある。そして、それについて中国が英国に抗議したといふ話も聞いたことがない。また抗議したからとて、英国が応ずる筈もないだらう。

歴史とは斯くもナショナルな感情や利益と密接して居り、万国に共通の歴史理解など、絶対にあり得ないと云へる。例へば我国とソ連に共通する歴史理解があるものなら、北方領土が返還されぬ理由はないだらう。北方領土が返還されないのは、正に日ソ兩國の歴史観と歴史認識が相違するからではないか。

他国の歴史が例外なくナショナルであるやうに、我国の歴史もナショナルであつてよい筈だ。歴史を「科学」であるとするのは、マルクス主義者の詭弁——それも精々今世紀限りで通用しなくなるに違ひない詭弁である。他国の「納得」や「理解」や「承認」を得て書かれるやうな歴史は、民族亡滅の墓標としては残らうが、国家民族の正史として人々の魂と記憶に留まることはないであらう。

大東亜戦争の解釈

教科書や靖国神社公式参拝のみならず、毎年繰返される卒業式での国旗掲揚、国歌斉唱をめぐる賛否の議論も、帰する所は歴史評価の問題である。

さう云へば、先帝陛下御不例の頃から喧しくなり始めた所謂「戦争責任」論も同じことだ。抑も「責任」なる語は、不当な行為に関して用ゐるべきものであり、「戦争責任」と云ふ以上、あの大東亜戦争を不当なる戦争、即ち侵略戦争、或は少なくとも無名の師と断ずる立場に立脚してゐる筈である。それ故、大東亜戦争が侵略戦争ではなく、自衛戦争であつたとの結論になれば、その「責任」を論ずること自体忽ち意味を失ふであらう。してみれば

ば、「戦争責任」有無の議論の根底にも、やはり歴史観の争ひが伏在して居り、大東亜戦争の正邪黑白についての検証を抜きにした戦争責任論は、法的責任論にせよ、道義的責任論にせよ、所詮虚漠の論に終る他ない。

では一体、大東亜戦争とは何だつたのか。それは東京裁判の「共同謀議説」や「侵略戦争史観」を援用しなければ説明できない戦争だつたのであらうか。

戦争は国家間の争ひであるが、それも結局は人間社会の争ひに過ぎない。さうであるなら、すべての個人間の争ひと同じく、双方の主張と立場を過去に遡つて突き合はせ、時間の経過に従ひつつ、両者の関係が変化し、推移してきた跡を辿つてみるなら、戦争についての納得のゆく解釈と評価が得られる筈であり、事実を理論に従属させる政治イデオロギーとしての侵略戦争史観など全く必要としないのだ。

筆者は大東亜戦争の構造を分析し、遡源することによつて、門戸開放主義をめぐる日米抗争及び共産主義との戦ひといふ二つの大きな筋道を探り当て、この二大潮流が合して高まる極頂点に大東亜戦争を定位することを得た。本書は、この大東亜戦争解釈を、多くの歴史的事実によつて裏づけんとする試みであると云つてよい。それはマルクス・レーニン主義に基づく史観の如く、あらゆる歴史現象を説明せんと欲する観念的な歴史観とは異なり（マルクス・レーニン主義の破綻と誤謬はいま我々が知る如く、歴史自体によつて立証されつつある）、あくまでも大東亜戦争に至る歴史の分析から得られた解釈であり、大東亜戦争限りの歴史解釈である。漠然たる歴史観とは全然別のものであることを申し添へておく。

戦後の禁忌を冒して

人間関係が複雑であるのに対応して、国家間の争ひである戦争の歴史と背景も複雑なものだ。一方を「加害者」、他方を「被害者」と単純に割り切ることは真実を歪めることになる。

従来、日本のみを「加害者」とし、中国や韓国を「被害者」として扱ふ定式がこれら両国の公定史観となつてきて居り、これに異を唱へることは、我国の学界、教育界、言論界に於て禁忌（タブー）とされてきた。だが本稿は、この禁忌に触れることも敢へて書くつもりである。世の中の全ての争ひには、当事者双方に幾分かづつの責任があるのが普通だからである。

右のことは、複雑な歴史的背景をもつ戦争に於て、殊更当てはまるであらう。歴史に対する責任の問ひ方には色々ある。武力の行使だけではなく、懈怠や退嬰や頑迷、内訌や腐敗や排外、違約や背信、領土的野心、互譲精神の欠如なども、国際関係を悪化させ、歴史を混乱に導く重大因子であり、それ相応に歴史に対して責任があらう。戦争責任といふものがあるとすれば、それはこのやうな広義に於ける歴史に対する責任を含むものでなくてはならぬ。これについて筆を曲げたのでは真実は埋没する。戦争の原因はいつに、責任はいつれに——。本書は禁忌を冒して直筆直言してゆかうと思ふ。

では「大東亜戦争への道」を語ることにしよう。これは「侵略戦争史観」への疑義を前提とする近代史再検証への一つの試論である。迂遠のやうだが、戦争の史的背景を重視する立場を取る筆者は、どうしても近代化への一歩を踏出した明治日本と清韓両国との関係から説き起すといふお決りの型を踏襲せねばならない。

第二章 近代日韓関係の始り